



## シヴァ教再認識派写本の伝承について

著者	川尻 洋平
雑誌名	人間文化研究所年報
号	26
ページ	179-188
発行年	2015-08-31
URL	<a href="http://id.nii.ac.jp/1219/00000500/">http://id.nii.ac.jp/1219/00000500/</a>

# シヴァ教再認識派写本の伝承について

川 尻 洋 平

## Observations on Scribal Annotations in the Manuscripts of the Pratyabhijñā

Yohei KAWAJIRI

### 0. はじめに

カシュミール地方で伝承されてきた写本には、行間や余白に多数の欄外註が残されていることはよく知られている。それらの欄外註が提供する情報は多岐にわたる。そこにはサンスクリット文献の伝承に関わった人々の思考過程の痕跡が残されているだけでなく、本文に対する注釈や本文理解に資する文献からの引用も残されており、写本筆記者が持っていた情報源が示唆されている。しかし、これまでの研究において、これらの欄外註が十分に活用されてきたとは言い難い。その理由の一つとして、それらの欄外註に出典はあるのか、またどのような人物によって欄外註が残されたのか不明瞭であったことがあろう。

数少ない欄外註に関する研究として、まず茂木 [1997] と室屋 [2009, 2010] が挙げられる。前者は、『サーンキヤカーリカー』 (*Sāṃkhyakārikā*) の注釈書『ユクティ・ディーピカー』 (*Yuktīdīpikā*) の写本に残された欄外註を調査し、後者は『ニヤーヤ・マンジャラー』 (*Nyāyamañjarī*) 写本の欄外註を扱ったものである。また Formigatti [2011] は、『ラグ・ヴァンシャ』 (*Raghuvamśa*) と『主宰神の再認識反省的考察』 (*Īśvarapratyabhijñāvimarsinī*) の写本を資料として、より広汎な視点からサンスクリット写本の欄外註を扱っている点で示唆に富む研究である。Formigatti [2011] は、『主宰神の再認識反省的考察』の第一章認識章第一日課に限定して、4種類の『主宰神の再認識反省的考察』写本を調査しているが、それらの写本には本稿で取り上げる『主宰神の再認識詳注』 (*Īśvarapratyabhijñāvivṛti*) の断片は含まれていない。欄外註に残される『主宰神の再認識詳注』断片に着目した研究が Ratié [forthcoming (a), (b)] である。『主宰神の再認識詳注』の内容解明に焦点が当てられているため、取り上げられている『主宰神の再認識詳注』断片

は多くはない。

再認識派研究において、Torella による『主宰神の再認識詳注』の校訂出版は大きな転換点といえる。これによって、欄外注に残される『主宰神の再認識詳注』断片を特定できる可能性が飛躍的に高まった。また、伝承の過程で失われていた『主宰神の再認識詳注』が、部分的であれ、校訂されたことによって、アビナヴァグプタがウトパラデーヴァの議論をどのように発展させたのかを解明することが可能になりつつある。今後の再認識派研究の展開を考慮すれば、『主宰神の再認識詳注』断片を可能な限り蒐集し、一刻も早く公開される必要がある。したがって、筆者は『主宰神の再認識詳注』断片の蒐集を企図して、シヴァ教再認識派写本の欄外注の網羅的調査に着手した<sup>1</sup>。本稿では、『主宰神の再認識詳注』断片を豊富に含むシヴァ教再認識派写本の欄外注についてこれまで調査した成果を報告する。

## 1. シヴァ教再認識派の典籍について

シヴァ教再認識派の創始者はソーマナンダ (Somānanda: ca. 900-950) とみなされているが、「再認識派」という名称は、ウトパラデーヴァ (Utpaladeva: ca. 925-975) の作品に基づく。南インドからアビナヴァグプタ (Abhinavagupta: ca. 975-1025) を訪ねたマドゥラージャ (ca. 1000-1050) によれば、下記の作品が再認識派の典籍である<sup>2</sup>。

- ・『主宰神の再認識偈』 (*Īśvaraṣṭyabhijñāḥārikā*)
- ・『主宰神の再認識注』 (*Īśvaraṣṭyabhijñāḥvṛtti*)
- ・『主宰神の再認識詳注』 (*Īśvaraṣṭyabhijñāḥvṛti*)
- ・『主宰神の再認識反省的考察』 (*Īśvaraṣṭyabhijñāḥvīmārsinī*)
- ・『主宰神の再認識詳注に関する反省的考察』 (*Īśvaraṣṭyabhijñāḥvṛtivīmārsinī*)

ウトパラデーヴァは、師であるソーマナンダの『シヴァ・ドリシュティ』の内容を反映させる形で<sup>3</sup>、まず『主宰神の再認識偈』と『主宰神の再認識注』(以下、『注』)を同時に著した。『注』は、『主宰神の再認識偈』の趣旨だけを明らかにするために著されており、『主宰神の再認識偈』の一語一語が詳細に註釈されているわけではない。後に、ウトパラデーヴァは『主宰神の再認識詳注』(以下、『詳注』)を著し、それぞれの偈に対して、時に別解釈を与えるなど派生的な議論を展開している。ウトパラデーヴァの孫弟子にあたるアビナヴァグプタは、まず『主宰神の再認識偈』に対する註釈として『主宰神の再認識反省的考察』(以下、『反省的考察』)を著した<sup>4</sup>。これは、ウトパラデーヴァ自身によって『主宰神の再認識偈』の一語一語が詳細に註釈されていなかったためである。アビナヴァグプタは、語源的解釈や派生分析を駆使して、詳細に解説している。さらにアビナヴァグプタは、『詳注』に対しても、『主宰神の再認識詳注に関する反省的考察』(以下、『詳注に関する反省的考察』)を著している。

## 2. 『詳注』の現存テキストについて

ウトパラデーヴァの『詳注』は一部を除いて現存していない。認識章第三日課「他者の見解の不合理」第六偈から第五日課「認識能力の確定」第四-五偈の導入部分までのみが現存する。この箇所については Torella による一連の論文によって校訂テキストおよび翻訳研究が出版されている<sup>5</sup>。Torella の校訂テキストは、元々はアビナヴァグプタ研究の碩学 K.C. Pandey の手書きのトランスクリプトに基づくものであったが、後に Torella 自身によってデリーのナショナルアーカイヴズで発見されたシャーラダー写本 (Mss. No. 30) に基づいている。このシャーラダー写本は、Pandey のトランスクリプトのオリジナルであり、現在の所、唯一の『詳注』写本である。『詳注』の他の断片については、『反省的考察』の KSTS の刊本の脚注から一部が回収されるだけであった。KSTS の刊本の脚注は、テキスト校訂に使用されたシャーラダー写本に与えられている欄外註がほぼそのまま採録されていることが Torella によって指摘されている<sup>6</sup>。このことから、シヴァ教再認識派写本の欄外註が、『詳注』について貴重な情報源であることが指摘できるであろう。

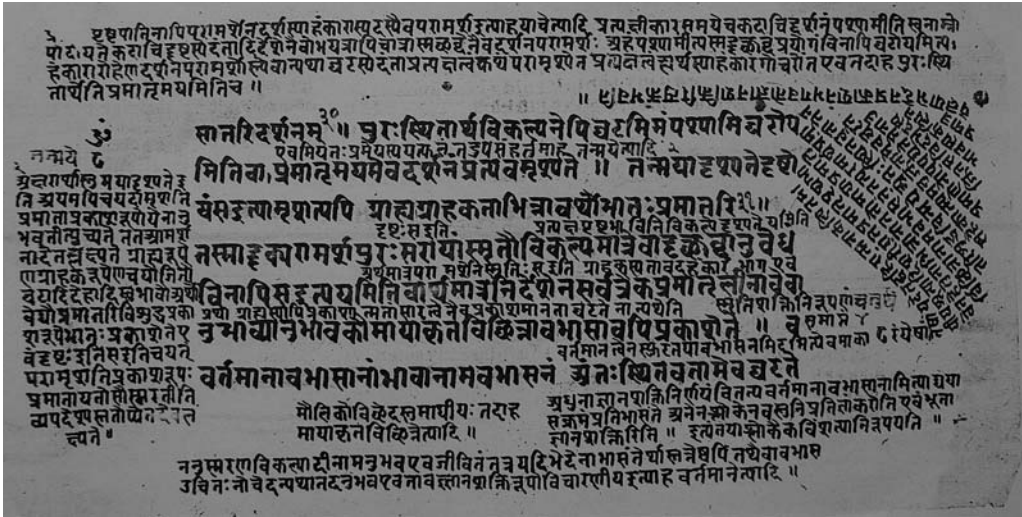
## 3. 写本欄外註に残された『詳注』断片

筆者は、インド留学中 (2006年-2008年) に、ラクノウの Akhila Bhāratīya Sanskrit Parishad で写本調査し、『主宰神の再認識偈』のデーヴァナーガリー写本 (Ms. No. 4408、紙写本) のコピーを入手した。この写本は、写本本体に『主宰神の再認識註』を含むが、同時に多くの欄外註も含む。それらの欄外註の典拠を調べていた所、大部分は『反省的考察』や『詳注に関する反省的考察』に同定することが出来たが、いくつかの欄外註に関しては典拠不明であった。それら典拠不明の欄外註を Torella によって校訂された『詳注』のテキストと照合した結果、『詳注』の断片であることが判明した。

### 3.1 欄外註の形態について

筆者が入手したのは、当該写本の白黒コピーであり、写本自体について知りうる情報は限定的なものである。しかし、欄外註の形態上の問題として、次の点が指摘できよう。

- (1) 本文は、中央に配置され、上下左右に余白がとられており、その余白および行間に欄外註が与えられている。
- (2) 本文と欄外註の筆記者は同一人物によるものと考えられる。ごく稀に、別の筆記者による書込がある。別の筆記者による書込は、日課の標題に限られる。
- (3) 分量は、本文よりも欄外註の方が多い場合もある。
- (4) パラフレーズなどの短い欄外註は、注釈される語の上側の行間に挿入される場合が多く、より長い欄外註については、上下左右の欄外に挿入される場合が多い。しかし行間に



IPK[L], folio 8 v.

挿入された長い欄外註が、上下左右の余白にまで及ぶ場合もある。

- (5) しばしばプラティーカーで注釈される箇所が明示されている。
- (6) 本文に対して、欄外註は小さめの文字で記されている。
- (7) 本文に平行に書かれていた欄外註が、余白の都合上、斜めや縦方向に書かれる場合があることから、余白を十分に考慮して欄外註を挿入しているとは言い難い。

### 3. 2. 1 欄外註の内容について：Torella による『詳注』テキスト対応箇所

欄外註の内容について、まず Torella によって校訂された『詳注』の部分、すなわち認識章第三日課「他者の見解の不合理」第六偈から第五日課「認識能力の確定」第四－五偈の導入部分までを照合した結果、以下が明らかとなった。

- (1) 欄外註は、『反省的考察』に同定できる。
- (2) 『反省的考察』に同定できない欄外註は、ほぼ『詳注』断片である。
- (3) 『詳注』を含む再認識派の文献に同定できない典拠不明の欄外註は、指示代名詞の指示対象や短い言い換えに限られる。そして、このような欄外註はほとんど見られない。
- (4) 当該範囲の『詳注』全15偈の内、11偈に対して『詳注』の導入が見られる。

以上より、この写本の欄外註の傾向として、再認識派の文献に同定できない断片は『詳注』からの引用であり、特に各偈の導入については、『反省的考察』の導入ではない限り、『詳注』の導入である可能性が高い、ということを描きよう。典拠不明の欄外註がほとんど見られないことは、筆者が自身の注を加えることを制限している可能性を示唆する。この点は、再認識派の文献に同定できない欄外註が『詳注』断片である可能性を高めている、という意味で重要である。

この箇所を検討した結果、欄外註を『詳注』断片とみなしうる基準を、以下のように設けることができよう。

- (1) 既に出版されている再認識派のテキストに同定できない断片。
- (2) 『主宰神の再認識偈』『注』のプラティーカを含む断片。
- (3) 『詳注に関する反省的考察』に断片の単語が引用あるいはパラフレーズされている断片。

当該写本については、再認識派の文献以外からの引用や筆記者による注がほとんど見られないということを考慮すれば、(1)の条件を満たすだけでも、断定はできないとしても『詳注』断片である可能性が比較的高い。しかし、(2)あるいは(3)、あるいはすべての条件を満たす欄外注については、ほぼ間違いなく『詳注』断片と考えられる。

### 3.2.2 欄外注の内容について：Torellaによる『詳注』テキスト未対応箇所

上述の基準から、他の箇所の欄外注についても調査を行った結果、以下が明らかになった。

- (1) 『反省的考察』や『詳注に関する反省的考察』に同定できる欄外注の内、大部分は『反省的考察』からの引用である。
- (2) 『反省的考察』や『詳注に関する反省的考察』に同定できない欄外注の大部分は、ほぼ間違いなく『詳注』断片である。
- (3) 『詳注』を含む再認識派の文献からの引用として同定できない欄外注はごく僅かである<sup>7</sup>。
- (4) 指示代名詞の指示対象を指示する欄外注や、別の語に置き換えるパラフレーズはほとんど見られない。
- (5) 筆記者が、同じ断片を繰返したり、本文である『注』を誤って行間に挿入している。
- (6) カシュミール系の写本は、『注』を完全には伝えていないが、当該写本も同様である<sup>8</sup>。
- (7) 『詳注』とみなされる断片が残されている箇所は、全体を通じて一定の割合ではなく、ある程度集中している。

Torellaによる『詳注』テキストに対応する範囲で見られた傾向が、それ以外の範囲においても見られることが確認できよう。特に注記すべき点として、まず(5)の事例が挙げられよう。これは、この写本の筆記者が、師の口述を、熟慮することなく、そのまま欄外に書き記した可能性を示唆する<sup>9</sup>。通常、シャーラダー写本は、内容を理解せずに書き写す一般信者や職業筆記者ではなく、複数の写本をもとに校訂する学識あるものによって伝承されてきたと考えられているからである<sup>10</sup>。あるいは複数の筆記者を想定した場合、デーヴァナーガリー写本に転写される前の段階で、欄外注が加えられたと考えられる。また『詳注』断片が、一定の割合で欄外注に現れるのではなく、ある程度集中している<sup>11</sup>。特に後半は、導入部分だけの場合が多い。このことは、『詳注』が完全な形で伝承されていたのではなく、部分的にのみ伝承されていたからかもしれない。少なくとも写本筆記者は、『詳注』の一部しか知らず、写本作成時の段階で『詳注』全体はすでに失われていた可能性が高い。



## 4. 終わりに

シヴァ教再認識派写本の欄外註は『詳注』断片の宝庫である。『反省的考察』写本の欄外註についても調査を進めているが、筆者が確認している限りでは、当該写本が含む『詳注』断片のほうはるかに多い。『反省的考察』写本の欄外註に比べて、『詳注』断片が多く見られるのは、当該写本が『主宰神の再認識偈』および『注』の写本であることと無関係ではないであろう。『主宰神の再認識偈』および『注』を研究する時には、『反省的考察』と『詳注』を主に参照していたことが伺える。『詳注』は、少なくとも写本伝承の伝統の中では、完全に失われてはいなかったであろう。

今後の課題としては、『反省的考察』写本の欄外註についてもさらに調査を進め、『詳注』断片を回収すること、また『注』写本の欄外註を重点的に調査することが挙げられる。特に写本伝承時には、欄外註もしばしばそのまま写されていることから同様の欄外註を有するシャーラダー写本の発見が待たれる。そしてこれらをもとに、『詳注』断片の校訂テキストおよび翻訳研究が作成されなければならない。

\* 本稿は、平成26年度科学研究費補助金 [研究活動スタート支援] (研究代表者：川尻洋平、課題番号25884089) による成果の一部である。Akhila Bhāratīya Saṃskṛit Parishad には、本稿で使用した写本の使用および複製の許可をいただき、また室屋博士からは多くの有益な助言を頂いた。関係各位に記して謝意を表したい。

## 略号および参考文献

ĪPV	<i>Īśvarapratyabhijñāvimarsinī</i> (Abhinavagupta): <i>The Īśvarapratyabhijñāvimarsinī of Utpaladeva, with Commentary by Abhinavagupta</i> , ed. Mukund Rām Shastri, 2 vols, KSTS 22, 33, Bombay 1918-21.
ĪPVV	<i>Īśvarapratyabhijñāvivṛtivismarsinī</i> (Abhinavagupta): <i>The Īśvarapratyabhijñāvivṛtivismarsinī by Abhinavagupta</i> , ed. Madhusudan Kaul Shastri, 3 vols, KSTS 60, 62, 65, Bombay 1938-43.
ĪPK[L]	<i>Īśvapratyabhijñākārikā</i> . Akhila Bharatiya Sanskrit Parishad, Lucknow, Ms. No.4408, paper; Devanāgarī script
KSTS	Kashmir Series of Texts and Studies.
ŚD	<i>Śivadr̥ṣṭi</i> (Somānanda): <i>Śivadr̥ṣṭi</i> , ed. Madhusudan Kaul Shastri, KSTS 54, Poona 1934.
ŚDV	<i>Śivadr̥ṣṭivṛtti</i> (Utpaladeva): See ŚD.
ŚP	<i>Śāstraṇāmarśa</i> (Madhurāja): <i>Abhinavagupta and His Works</i> , V.Raghavan, Varanasi: Chaukhambha Orientalia, 1981.
Formigatti, Camillo 2011	<i>Sanskrit Annotated Manuscripts from Northern India and Nepal</i> , [Unpublished

- PhD thesis], Universität Hamburg.
- 川尻洋平  
[forthcoming (a)] “New Fragments of the *Īśvaraṣṭyabhijñā-vivṛti*.” In *Utpaladeva: Philosopher of Recognition*, eds. B. Bäumer and R. Torella, Shimla: Indian Institute of Advanced Studies.
- [forthcoming (b)] “New Fragments of the *Īśvaraṣṭyabhijñā-vivṛti*(2).” In *Proceedings of Japan-Austria International Symposium on Transmission and Tradition: The Meaning and the Role of “Fragments” in Indian Philosophy, Matsumoto, August 20-24, 2012*, eds. E. Prets and H. Marui.
- Krasser, Helmut  
[2011] “How to Teach a Buddhist Monk to Refute the Outsiders: Text-critical Remarks on Some Works by Bhāviveka.” *Dhīḥ* 51(2011) 49-76.
- 茂木秀淳  
[1997] 「Yukitidipikā カシミール写本の欄外註について」『印度学仏教学研究』第45巻第2号、(82)-(87).
- 室屋安孝  
[2009] 「『ニヤーヤ・マンジャリー』写本の欄外註について」『印度学仏教学研究』第58巻第1号、(223)-(226).
- [2010] “A Study on the Marginalia in Some Nyāyamañjarī Manuscripts: The Reconstruction of a Lost Portion of the Nyāyamañjarīgranthibhaṅga.” *Wiener Zeitschrift für die Kunde Südasiens* 52/53: 213-267.
- Nemec, John  
[2011] *The Ubiquitous Śiva. Somānanda’s Śivadr̥ṣṭi and his tantric interlocutors*. New York: Oxford University Press.
- Ratié, Isabelle  
[forthcoming (a)] “Some hitherto unknown fragments of Utpaladeva’s *Vivṛti* (I): On the Buddhist controversy over the existence of other conscious streams.” In *Utpaladeva: Philosopher of Recognition*, eds. B. Bäumer and R. Torella, Shimla: Indian Institute of Advanced Studies.
- [forthcoming (b)] “Some hitherto unknown fragments of Utpaladeva’s *Vivṛti* (II): against the existence of external objects.” In *Mélanges tantriques à la mémoire de N. Ramacandra Bhatt*, eds D. Goodall and P.S. Filliozat.
- Torella, Raffaele  
[1988] “A Fragment of Utpaladeva’s *Īśvaraṣṭyabhijñā-vivṛti*.” *East and West* 38:137-174.
- [2002] *The Īśvaraṣṭyabhijñā-kārikā of Utpaladeva with the Author’s Vṛtti. Critical Edition and Annotated Translation*. II ed., Delhi: Motilal Banarsidass. [I ed. Serie Orientale Roma 71. Roma: Istitute Italiano per il Medio ed Estremo Oriente, 1994].
- [2007a] “Studies on Utpaladeva’s *Īśvaraṣṭyabhijñā-vivṛti*. Part I. *Apoha* and *anupalabdhi* in a Śaiva garb.” In *Expanding and Merging Horizons. Contributions to South Asian and Cross-Cultural Studies in Commemoration of Wilhelm*



- [2007b] Halbfass, ed. K. Preisendanz, 473-490. Vienna: Austrian Academy of Sciences.  
 “Studies on Utpaladeva’s *Īśvarapratyabhijñā-vivṛti*. Part II. What is memory?”  
 In *Indica et Tibetica. Festschrift für Michael Hahn zum 65. Geburtstag von Freunden und Schülern überreicht*, eds. K. Konrad and J.U. Hartmann, 539-563.  
 Wien: Arbeitskreis für Tibetische und Buddhistische Studien, University of Vienna.
- [2007c] “Studies on Utpaladeva’s *Īśvarapratyabhijñā-vivṛti*. Part III. Can a cognition become the object of another cognition?” In *Mélanges tantriques à la mémoire d’Hélène Brunner*, eds. D. Goodall and A. Padoux, 475-484. Pondicherry: Institut Français de Pondichéry/Ecole Française d’Extrême-Orient.
- [2007d] “Studies on Utpaladeva’s *Īśvarapratyabhijñā-vivṛti*. Part IV. Light of the subject, light of the object”. In *Pramāṇakīrtiḥ. Papers dedicated to Ernst Steinkellner on the occasion of his 70th birthday. Part 2*, eds. B. Kellner, H. Krasser, H. Lasic, M. T. Much, H. Tauscher, 925-939. Wien: Arbeitskreis für Tibetische und Buddhistische Studien, University of Vienna.
- [2009] “Variazioni Kashmiri sul Tema della Percezione dello Yogin (*yogīpratyakṣa*).” *Rivista degli Studi Orientali* 81: 35-58.
- [2013] “Studies in Utpaladeva’s *Īśvarapratyabhijñā-vivṛti*. Part V: Self-Awareness and Yogic Perception.” In *Devadattīyam: Johannes Bronkhorst Felicitation Volume*, eds. Francois Voegeli, Vincent Eltshinger, Danielle Feller, Maria Piera Candotti, Bogdan Diaconescu and Mahlar Kulkarni, 275-300. Bern: Peter Lang.
- [2014] “Utpaladeva’s Lost *Vivṛti* on the *Īśvarapratyabhijñākārikā*.” *Journal of Indian Philosophy* 42:115-126.

## 注

<sup>1</sup> その成果の一部を既に発表しており、『詳注』断片のディプロマティックエディションについては、拙稿 Kawajiri [forthcoming (a), (b)]を参照されたい。これらは認識章の終わりまでを対象としている。行為章以降の『詳注』断片については準備中である。

<sup>2</sup> *Śāstraḥpramāṇaśāstra* 4: sūtram vṛttir vivṛtir laghvibhṛthyubhe vimarśinyau / prakaraṇavivaraṇapañcakam iti śāstraṃ pratyabhijñāyāḥ // (「『シヴァドリシュティ』という論書に対する五つの註釈、すなわち『偈』(sūtra)、『注』(vṛtti)、『詳注』(vivṛti)、『短編 [の反省的考察]』と『長編 [の反省的考察]』という二つの反省的考察が再認識に関する論書である」)

<sup>3</sup> See ĪPV I p.2-3: śrītrayambakasadvamśamadhaymuktāmāyasthiteḥ / śrīsomānandanāthasya vijñānapratibimbakam // anuttarānanyasākṣipumarthopāyam abhyadhāt / īśvarapratyabhijñākhyam yaḥ śāstraṃ yat sunirmalam // tatpraśiṣyaḥ karomy etāṃ tatsūtravivṛtiṃ laghum / buddhvābhinavagupto haṃ śrīmallaḥṣamaṇaguptataḥ // (「彼 [聖ウトパラデーヴァ] の孫弟子である私アピナヴァグプタは、聖ラクシュマナグプタから学び、このスートラの注釈を簡潔に著す。彼 [ウトパラデーヴァ] は、『主宰神の再認識』(*Īśvarapratyabhijñā*) と呼ばれる論書を著した。[その論書は、] 聖トリラムバカ (Tryam-

baka) というすばらしい血筋の中で真珠に他ならないものとして存立する聖ソーマーナンダの知識を映すものであり、[最高シヴァ以外の] 他者を直証者としなない [解脱と呼ばれる] 人間の最高目的の [達成] 手段であり、すばらしく無垢なるものである。) またウトバラデーヴァは、『詳注』を著した後に、『シヴァ・ドリシュティ』に対する注釈も著している。ŚDV 1.13 cd-17: nāpi tadātmatāprathā bhrāntir iti sarvam uktaṃ ṭikāyām / See Nemeč [2011:121, fn.156].

<sup>4</sup> アビナヴァグブタは、『詳注に関する反省的考察』の中で『反省的考察』に言及していることから、『反省的考察』を先に著したと考えられる。See ĪPVV III 230: anenaiva āśayena asmābhiḥ sūtravimarśinyām ekarasatvena idaṃ sūtram vyākhyātam, iha tu yāvadgati vicārayitum itthaṃ vibhāgena apekṣā vyākhyātā /

<sup>5</sup> See Torella [1988, 2007a, 2007b, 2007c, 2007d, 2009, 2013, 2014].

<sup>6</sup> KSTS の刊本で Gh と言及されている写本である。現在はナショナルアーカイヴスに保管されている (Skt. Ms. No. 5)。

<sup>7</sup> このような欄外註の内、典拠が明示されている欄外註は 2 箇所のみである。いずれも『ヌリ・パティ・ヴァールティカ・ティーカー』 (*Nṛpativārttikā*) からの引用である。『ヌリ・パティ・ヴァールティカ・ティーカー』について、作者や時代などの情報はない。興味深いことに、当該写本の『ヌリ・パティ・ヴァールティカ・ティーカー』の断片は、KSTS 版の『シヴァ・ドリシュティ』の脚注の一節に一致する。この脚注も、おそらく写本の欄外註を採録したものであろう。そこでは出典は明示されていない。異なる文献の写本の欄外註に同一の断片が見られることは、再認識派の伝統の中で、『ヌリ・パティ・ヴァールティカ・ティーカー』の一節が広く流布し、記憶されていたことを示唆している。See ŚD 21, fn.3: avigalitasvarūpasatattvasyaiva bhāvasya dharmakalparūpāntaracchāyādhāraṇaṃ ghaṭasyevodakāharaṇaṃ caitrasyeva gamanaṃ vṛttir ucyate / tathā tadvṛttibhedān na vṛttibhedo bhavati tenaiva rūpeṇāvādhitapratyabhijñāviśayatvāt / ; See ĪPK[L] 3v: ataḥ pariṇāmād ayam anyo vṛttisabdasyārthaḥ avigalitasvarūpasatattvasyaiva bhāvasya dharmakalparūpāntaracchāyā dhāraṇaṃ ghaṭasyevodakāharaṇaṃ caitrasyaiva gamanaṃ vṛttir ucyate pariṇāmas tu svarūpāntarapattir eveti nṛpativārttikāṭikāyām //; ĪPK[L] 3v: anyā ca vṛttiliḥ pariṇāmāt pariṇāmo hi pūrvasvabhāvatirodhānenaiva yathā ghaṭasya kāpālānivr̥ttis tu tasyaiva rūpasāpratyastamitasya yathā bhūtenaiva parāmṛśamānasya yathā tathā vatena tadyathā devadattasya gamana ghaṭasyodakāharaṇaṃ tadvṛttibhedānutattvabhedo bhavati tenaiva rūpeṇāvādhitapratyajñāviśayatvāt iti ca nṛpativārttikāṭikāyām// (ここに引用する欄外註は、写本のままであることを注記しておく)

<sup>8</sup> 『注』はカシュミール系の写本には、完全な形では伝承されていないが、トリヴァンドラム写本には完全な形で伝承されている。See Torella [2002:XLVI-LIV].

<sup>9</sup> Krasser [2011] によれば、仏教の伝統においても、弟子が師匠の講義を聴き、それを書き残すことがあった。

<sup>10</sup> See Torella [2002: XLVI].

<sup>11</sup> 『詳注』断片を最初に確認できるのは、ĪPK1. 2. 1-2 である。以下、『詳注』断片が回収できる偈は次の

とおりである。IPK 1.2.4, 1.2.6-8, 1.3.5-7, 1.4.1-8, 1.5.1-12, 1.5.17-18, 1.6.7-11, 1.7.1-6, 1.7.8-10, 1.8.11, 2.1.1-7, 2.2.1-5, 2.3.1-8, 2.4.8-9, 3.1.1, 3.1.3-6.

(かわじり ようへい：人間文化研究所 リサーチアソシエイト)